

林間都市

- 会見記 -

話者 田丸 信明



小田急との出会い

- 大和市は第二次世界大戦後の経済復興に伴って、政治・経済の中核である首都圏のベッドタウン的な発展により純農村から脱皮して、昭和 34 年 2 月 1 日に市制を施行し、文化都市としての自立を遂げ、現在も発展途上にある市ですが、この市が非常な飛躍をする昭和期の歴史をみると、小田急江ノ島線及び相模鉄道の設置が強く市域の発展に影響していると思わざるを得ません。今日はそのうちでも小田急江ノ島線敷設により直接誕生した街と考えられる、市域の南林間地域の初期の状況を小田急電鉄株式会社に大変関係が深く、当初から南林間にお住いの田丸信明さんにご出席いただきまして、いろいろと南林間の今日の繁栄の過程、特にその発端に焦点を当ててお話をうかがいたいと存じます。

田丸さん今日はお忙しいところを恐縮です。南林間地域の発展については、常々その足跡を調べておかなければいけないと考えていたのですが、参考資料が無くて、実は困っておりました。そして、ふと田丸さんにお聞きすればと気づきまして、ご無理を願ったわけです。どうぞよろしく願いいたします。

早速ですが、田丸さんが小田急に入社されて、南林間に移られたのはいつ頃ですか -

田丸 わたしは昭和 2 年に小田急から正式に辞令をもらって、小田急の小田原線が昭和 2 年に開通しましたので、小田原線の車掌や運転手をしました。小田急は初代の利光鶴松社長や社長の娘婿の伊東亮一常務などの社員教育が大変厳しくてね、会社の中ではどんなに言合いをしてもいい、でも、決して乗客に迷惑をかけてはいけない。乗客はどんな大事があっても電車を利用されているのかわからないのだからと、ずい分教育をされました。

- 今でも小田急はストをしません、乗客には絶対迷惑をかけないという会社の方針が当初から徹底していたのですね -

田丸 そうです。そしてわたしが南林間に来たのは昭和4年です。

- 田丸さんは、その頃から土地の開発の仕事をなさったのですか -

田丸 いや、わたしは初めは電車に乗っていました。

- 新宿からずっとですか -

田丸 今は新宿からずっと江ノ島までつながっていますがね、昔は原町田から折り返していたのです。わたしは初めは車掌をやっていたのですが、南林間に住んでいられた三浦貢さんという上役が田丸は南林間の駅をやれということで、駅に移って駅の仕事と土地開発の仕事と両方やるようになったのです。

- その頃の南林間の駅には、駅員が何人位いたのですか -

田丸 4、5 人いましたね。あの頃は送信閉塞といって今のように自動信号ではなくて、南林間と長後の間は信号で合図しないと電車が出せなかったもので、その責任者がいなくてはいけなから、あの駅には助役が二人いました。

- 送信閉塞信号をするというのはどういうことですか -

田丸 下り電車が来ると駅の責任者が長後駅と打合せをする。走っていいか、悪いかね。信号で連絡して、いいということになると電車を出したのです。その責任者が助役でした。

- では駅の停車時間はずい分長かったわけですね -

田丸 そうです。助役が合図するまで止っているのです。

- 小田急はたしか初めから複線でしたでしょう -

田丸 そうです。

- その信号は、上りの場合は相模大野との通信になるわけですか -

田丸 いや、南林間より北は自動信号になっていたから、南林間から藤沢までが送信

閉塞だった。1、2年そんな状態だったと思いますね。

土地の開発のことは、初めは本社の社員が来てやっていたのですが、誰か現場がよくわかる者を置いておかないと、土地は売ったけれども案内をする人が本社から来るのでは、間に合わないということで。

- それで田丸さんが南林間の案内をすることになられたのですね -

田丸 初めは駅の仕事と兼任だったのですが、その内それでは無理だということになって、土地を専門にやるようになったのです。

- 田丸さんのような立場の人が各駅にいたのですか。例えば中央林間の駅などにも -

田丸 いや、わたしは別でした。小田急は大正12年5月1日に資本金1,350万円、社長利光鶴松で小田原急行鉄道株式会社が設立され、まず、昭和2年4月1日に新宿 - 小田原間で小田原線が開通し、一方、江ノ島線は大正15年10月に藤沢線として大野村と藤沢町間の鉄道敷設が免許され、つづいて昭和2年12月に片瀬線として、藤沢町と片瀬間の敷設が免許されて、昭和4年4月1日に江ノ島線として大野 - 江ノ島間が開通したのですが、同時に小田急では、路線敷地を買収するとともに沿線開発地を買収し、耕地を地に開発して、沿線の発展をはかったのです。そしてその開発計画の一つに、林間都市の建設計画があって、わたしはその土地開発係になったということです。

- では南林間の駅は、林間都市計画の中心になる特殊な駅だったのですね -

田丸 そうです。小田急の開通当時の会社の経営は大変でした。一般乗客なんてほんとうにわずかだったのですから、莫大な運営費にみあう運賃はなかなかあがりませんしね。ですから、沿線に電車に乗ってくれる人達が多勢住んでくれなければ困るわけです。そこでどうしても広い場所をこしらえて、いい人達が住む条件の整った場所を造るのです。こういうやり方は、他の私鉄でも同じで、田園調布の街を造ったり、綱島温泉を開いたりしています。

- 乗客をふやすために街を一つ造ってしまおうというわけですね -

田丸 ええ、宅地を造成して、土地で儲けて、運賃で儲ける。そうしなければ鉄道はやれないんですね。なぜかというとな、鉄道というのは勝手に運賃が上げられないでしょう。監督官庁の許可が出ないと1円でも運賃が上げられない。許認可制ですからね。

そういう仕組だから、自分のところだけ5円のところを、それでは採算がとれないからといって10円もらうというわけにはいかないんです。1m当りいくりに計算しろというような規則があって、それにのっとってやらなければならないでしょう。だから乗客をふやすより手はないのです。

- そこで不動産事業とか、デパート経営とかを別にやるわけですね -

田丸 そうです。不動産は別ですから、あれは鉄道の兼業興業で、鉄道が何とかやっていけるようにするためには財産がなければなりません。ですから、沿線にそういう事業を持つ必要があるのです。鉄道だけでは成り立たないのですよ。原っぱを飛んで走ってもだめだっていうことです。

林間都市建設計画 (p21・南林間都市平面図(部分)参照)

- 鉄道がなぜ沿線に莫大な資金を投じて都市建設をするかがわかってきました。ところで小田急の林間都市建設構想は大部大がかりなものであったと聞いていますが、まず、土地の買収が大変だったと思いますが、それはスムーズにいったのですか -

田丸 鉄道は莫大な敷地が必要ですが、当時は山林や原野が多かったので、今のよう土地の獲得に苦労するという事はなかったのですが、それにしても大変なことです。地主との価格の交渉などでは担当はずい分苦労しています。小田急では大正14年1月に小田原急行土地株式会社が資本金300万円で設立されて、その不動産会社が土地を買収したのです。この会社はのちに小田急へ吸収合併されますから、この会社へ融資した人達の株は自動的に小田原急行鉄道株式会社の株に変わったのですけれど、融資者もそれでいいということですね。林間都市建設予定地としては約100万坪(約3,305平方km)を相模大野から南林間、西の方は座間にかけて買収しましたが、この会社が全部やりました。当時大和村にはなん人が非常に開発に協力してくれた人がいられてね。下鶴間の長谷川万五郎さんや高下才介さんなどがね。

- その人達は駅前にあった公会堂に開発協会の事務所をもって、土地開発の事務にあたっていられたようですね。先日、現在市の代表監査委員をされている高下幸男氏から、その頃高下才介さんがよまれたという句をお聞きしました。「空びんに山百合さすや仮事務所」という句でしたが、当時の感じが出ていて面白いと思いました

田丸 そうです。長谷川万五郎さん達の事務所があつてね。万五郎さんが親分で、天野さんや他の人達が手伝って、小田急の人と同じように飛んで歩いて面倒をみてくれたのです。

- その人達は小田急とは直接関係はなかったのですか -

田丸 後日小田急の株主になりましたけれど、その時はそういう人達がグループを作って資本を出し合って土地を買って、その資本が小田急の株になったので、ぜんぜん文句なく小田急の株主になったわけです。長谷川万五郎さん、この人は下鶴間の長谷川家の代表をされていたと思いますが、それに高下才介さん、公所の大谷治国さんや古木さんなど、小田急のためにほんとうによく協力してくれました。国会議員になった岩本信行さんなどもよく協力してくれたのです。わたしは、昭和4年に南林間に来ましたので、土地を買収した当時のことはあまりくわしくは知らないのですが、公所の古木英保さんなどが地元の人で地主さんですし、小田急に勤めていられたから、この間の地元側と小田急側の事情はよくご存知ですから、一度古木さんに聞かれるといいですね。

- では今度は古木さんにお会いして、よくうかがってみることにいたします。それで分譲地の開発ですが、これには小田急はずい分力を入れたのでしょうか -

田丸 そうです。小田急が死ぬか生きるかが、その土地の生かし方にかかっていたからね。あの土地がなかったら小田急の経営は大変だったと思いますね。だって電車賃は上げられないし、1日90銭や80銭で電車を走らせたって、それはぜんぜん赤字ですよ。今では想像もつかないでしょうがね。

- 小田急の江ノ島線の目的は江ノ島・鎌倉の観光が考えられていたと思うのですが、分譲地の売却収入が鉄道運営上の大きな資金になるわけですね。そして、それは沿線の開発地からの乗客をふやすことになり、本来の鉄道の収入につながるということで開発に力が入るわけですね -

田丸 江ノ島は夏だけのことだから、冬の間はどうしようもない。小田原線なども長いから人が乗らないと大変だったしね。

- 江ノ島線の方がよかったのですか -

田丸 いや、そうでもない。あっちは厚木・伊勢原・秦野など下鶴間の宿のような集落をねらって通っているから、そういうところにはやはり利用者が住んでいるでしょう。

- たしかに神奈川県地図を見ると、小田急は丁度いいところを貫通していますね。

どこも小田急線が入らないと不便なところですからね -

田丸 小田急がなければ、わらじをはいて原町田に出るか、東海道の駅に出なければ汽車に乗れないでしょう。大和だって不便なところでしたよ。

小田急では沿線の開発は他にもかなりやっていますね。祖師ヶ谷大蔵や喜多見・狛江などの周辺の土地を住宅地に開発して分譲住宅を売り出したり、成城学園前は小原国芳さんが広い土地を取得し、牛込にあった学園を移して、周辺の土地を高級住宅地として区画整理して売出すとともに、当時朝日新聞社が近代的ないろいろな形の洋風住宅を建てて、展示販売したために高級住宅地として発展したのですが、小田急はそれらの事業には全面的に協力したのです。小原さんはその後、玉川学園を小田急沿線に建設して、成城学園のときのように広い地所を取得して、住宅地を造成し、分譲して学園経営の資金を得るとともに高級住宅地の基盤をつくったのです。この場合は学園側が駅用地と駅舎を提供して、玉川学園前という駅を小田急につくらせているのですが、これらはすべて小田急沿線が開発され、定住者が多くなれば電車の乗客がふえるということで会社は完全にバックアップしたのです。その他にも鶴巻温泉を復興して駅前温泉街をつくったり、向ヶ丘遊園地をつくったり、これは実現しなかったけれど座間駅周辺にも遊園地をつくる計画をしていたのです。

- そういう状況の中で小田急は江ノ島線沿線の開発地として、東林間・中央林間・南林間の駅を中心にして林間都市を建設する計画をたてたのですね -

田丸 そうです。林間都市の開発計画は利光鶴松社長の計画で、会社では江ノ島線の開通の前に大正14年頃から昭和2年頃にかけて、大野、大和、座間の間で約100万坪(約3,305平方km)の土地の買収をしたのですが、その内約80万坪(約2,644平方km)が昭和初期に買収されたのです。そして林間都市耕地整理施行認可が昭和3年9月において、翌4年の11月から南林間地区の土地販売が開始されています。南林間地区は駅前から西に向って南北に一条、二条と十条まで道路があり、更に東西に駅前から真直ぐに中央道を通して、北側に北一条、二条……、南側に南一条、二条……と道路をつけて碁盤の目のように土地を区切ったのです。一区画3,000坪(約9,917平方m)にきっちりと区切って、その廻りに道路をめぐらし、その中を更に500坪(約1,652平方m)なり、200坪(約661平方m)なりに区切って分譲したのです。

- 林間都市構想は高級住宅地というか、かなり文化度が高い個性的な都市づくりが想定されていたと思うのですが、小田急としては、成城学園とか田園調布といったような町並の構想だったのでしょうかね -

田丸 会社の方針は初めからそうだったのです。すでに交通機関とタイアップした東

京近郊の田園都市の建設は、渋沢栄一が目黒蒲田電鉄の沿線で成功していて、それが田園調布ですが、社長の利光鶴松も林間都市建設構想は大きくもっていて、駅を中心にして放射された街路を碁盤目状にめぐらし、松林の中に高級住宅を点在させ、公会堂やテニスコート・ラグビー場・ゴルフ場・野球場それに相撲場や学園などを建設して、快適な林間都市生活が楽しめる豊かな住宅都市をつくり出すつもりだったのです。そして隣りの東林間地区には工場を誘致して、産業都市を建設する構想でした。

- ずい分雄大な構想ですね -

田丸 初代の利光社長は「林間都市遷都論」までブチ上げた人ですから、それは壮大なものです。それが成れば凄い街ですよ。

- 現在の南林間・中央林間・東林間の駅は当初は南林間都市・中央林間都市・東林間都市という駅名だったと聞いていますけれど -

田丸 当初これらの駅は、相模ヶ丘・公所・中和田という駅名が予定されていたのですが、林間都市のイメージアップをするために南林間都市・中央林間都市・東林間都市と江ノ島線開通の直前に変更されたのです。

- 当初の計画通りにはいかなかったにしても、昭和6年頃には南林間地区は、公会堂・野球場・ラグビー場・テニスコート・相撲場が設置され、大和学園も開校されていますし、中央林間にはゴルフ場ができて相模カンツリー倶楽部が設立されて、かなり予定の施設ができていますね。

大和学園も都市構想の中に含まれているようですが、あの学校の経営も小田急だったのですか -

田丸 大和学園は利光社長の一人娘だった伊東静江さんが江ノ島線開通後の昭和4年5月に開校した学校です。生徒はほとんど東京方面から通っていた。わたしの娘も入学していたが、東京方面から通学する生徒が多く、今のように試験をやるわけではないのですから、半ば命令で大和学園に来るわけですよ。お前の家の娘は大和学園にやれと、そうしないと伊東静江が困るじゃないかということでね、教師陣も伊東静江がそれだけやるのならということで、東京の政治家の娘さん達が手伝って教えていたのです。鳩山一郎さんの奥さんの薫子夫人なども援助してくれたし、演劇部の指導には久保田万太郎、田村秋子、舞踊部では江口隆哉、音楽部では四家文子など知名人が教えていた時もありました。昭和9年頃には自動車部ができるし、写真部やグラ

イダー部などクラブ活動も早くから盛んだった。大和学園はカトリック女子校で伊東静江さんは熱心なカトリック信者でした。女子教育に熱中した人で、父親ゆずりの強い人だったから、ずい分厳しいしつけをしていられたね。

学校の敷地は小田急が出して、校舎は座間と経堂にあった会社の教習所を移築したのです。今でもあの学校の付近には松の木が何本か残っていて、かろうじて林間の学校をしのばせますが、当時は松林を切り開いて敷地を造ったのですから、周囲は松林ばかりという環境でした。

- お嬢さん学校のイメージが強かったのですが、当時村の人や周辺の町村からは、あまり入学しなかったのですか -

田丸 入ってくればよかったのですが、まだ月謝を払って女子教育をする家はまれだったし、カトリック系の学園ですしね。

- 大和学園には専用電車があったと聞いていますが -

田丸 そうです。新宿から2両編成で来ましてね。1両が女生徒専用電車で南林間都市駅で生徒が降りるとその車両は駅に留めておくんです。ですから側線を付けたのは南林間都市駅が一番初めでした。そして授業が終るとまたその電車を使って東京へ帰るといった具合で、豪勢なものでした。

- 校長先生もお住いは東京ですか -

田丸 喜多見です。あそこに利光社長の豪邸があったから、先生も生徒もその電車に通っていたのです。

- 伊東静江氏はお亡くなりになりましたが、今はどなたが校長ですか -

田丸 戦時中から戦後の混乱を経て教育方針や運営でいろいろな苦難があったようですが、現在は伊東静江さんの次女の伊東千鶴子さんが校長で、幼稚園や短大も併設されています。初めは敷地や校舎を小田急が設備したのですが、結局利光社長が娘さんにやったようなものですね。昭和54年11月には創立50周年記念の式典が行われました。

- 他に林間都市計画には文化施設としてスポーツ施設がかなりあって、完成されているものもだいぶあったのですが、あれらの施設は当時どのような使われ方をしたの

ですか -

田丸 あその人は誰でもみんな使えたのです。そういう施設もつくるということで土地を買ってもらっているのですから。

- 下鶴間の宿辺りの農家のお年寄が、若い頃テニスや硬球で野球をやったという話を聞くのですが、地元のスポーツ振興にもずい分影響したのかもしれないね -

田丸 そうでしょう。大和学園の東側に、今は大和学園の短大の校舎が建っていますが、あの辺が全部運動場だったのです。野球場・ラグビー場・テニスコートなどが並んでいました。

- その頃ラグビーなど、この辺の人がやったのでしょうか -

田丸 東京の連中が来てやっていました。東京の学生などが来てやっていたのです。八角堂という合宿所があって、食事もできましたし、泊ることもできました。

- 大和学園に八角堂という八角形の変った建物がありますが、あれがそうでしょうか -

田丸 残っていますか。でもあれは昭和 42、3 年頃に建てられたものですから違いますね。今の短大側、線路の東側に建っていたのです。

一時小田急では林間都市の分譲地をスポーツ都市分譲地として売り出したこともありましてね。スポーツ施設を沢山つくって、その管理といえますか監督を、中央林間に住まわれて衆議院にも出られた慶応義塾出の鷲沢与四二さんに頼んでやってもらっていました。鷲沢さんは社長の友人で林間都市建設に尽力してくれた人です。

- うらやましいような企画ですね。他にも『小田急五十年史』を読みますと、松竹の撮影所をもってこようという計画があったようですが -

田丸 そうです。そういう計画があって松竹が 12,000 坪 (39,669 平方 m) 4 区画を持ってくれたのです。駅から行くと左側の十条通り辺りの、今農林省が使っている敷地があるでしょう。あの辺りでした。いずれ撮影所でもこしらえてもらえば、小田急の乗客もふえるだろうということで、松竹の大谷竹次郎社長に頼んだのです。そうしたら大谷さんがそれではそうしましょうと承知されて、4 区画とってくれたのです。他にも相撲学校を建てようという計画もあって、昭和 6 年には相撲養成所を開いて、当時人気力士だ

った大関の大的里や関脇の天龍、神奈川県出身の小結武蔵山などが来て土俵開きの相撲大会をしましたよ。

- それは面白いですね。お角力さんや映画俳優でにぎわう街になったかもしれない。それから何年か前まで駅の東側に公会堂がありましたが、あれはどういう使われ方をしたのですか。たしかステージが付いていたように記憶していますが -

田丸 小田急の従業員が慰安会などに使っていたのです。もちろん一般の人達も使っていていいんです。長谷川万五郎さん達がやっていた開発協力の事務所もあの中にあつた。後年一時小学校になっていたこともありましたが、それは林間都市計画の中には小学校の建設用地も用意されていましてね。今林間小学校が建っているところをあてていたのですが、5,000坪(約16,529平方m)位はあつたでしょう。土地を買った人達との契約に学校を建てるという約束があつたから、それですぐに学校を建てられないので、一時小学校の校舎が不足した時に公会堂を使ってもらつたのです。その後林間小学校を大和町が建てたのですが、そういう経緯があるので、あの敷地は全部小田急が出したのです。

- そうしたことだったのですか。小田急では分譲住宅のようなものは建てなかつたのですか -

田丸 建てましたよ。会社で家を建てなければ開発途中の辺りなところへなど人が来ませんからね。どんどん貸家を建てました。1軒や2軒家があつても電気も敷いてもらえませんか。分譲住宅といつても、その頃45円位の給料で土地と家を買えといつたつて無理ですからね。貸家を建てたのです。

- 何軒位建つたのですか -

田丸 初めは40戸位だったのかな、大和学園へ行く途中のちょっと窪んでいるところあるでしょう。あの辺の線路側と反対側にもあつた。わたしも一時あそこに住んでいたのです。それから今の駅前の方へ家を建ててもらつて移つたのですがね。その辺にも12、3戸貸家を建てました。

- 今はみんな個人の持家ですか -

田丸 それはね。5円位家賃もらつても会社は採算がとれないのですよ。あの辺りは井戸が深くて80尺(約24メートル)も掘らなくては水が出ないのです。井戸屋さんが1

人付きっきりでいて、ちょっと水が出ないと井戸屋さんを頼むでしょう。だから5円位の家賃ではぜんぜん採算がとれないんです。会社はそれで何とか入っている人を買取ってもらおうと思って、月賦でいいから是非買ってくださいと頼んだのです。わたしはそれで「売りつけるなんてひどい」なんて、ずい分怨まれたりしましたがね。

- 今になれば、その方がよかったですね -

田丸 そう思うのですが、土地が生きていますからね。今は会社のものは1軒ありません。

- その貸家は誰でも借りられたのですか -

田丸 そうです。誰でもいいんです。でも当時はなかなか他の人は入ってくれないから、小田急の従業員を連れて来ては入ってもらったのです。車庫の人とか、駅員や保線や電気の人達をね。そんな時期でした。

- 分譲地を買う人はかなりのお金持ちですね -

田丸 小田急の重役はずい分買われましたね。2代目社長の利光学一さんや重役の三浦貢さん、渋谷寛治さん、川又貞次郎さんなど広い区画を持っていました。まず小田急の重役から買い始め、やはり会社の重役、政治家、銀行家、芸術家などがかなり多かったです。吉井勇、浅原六郎、唐木順三、龍膽寺雄さんなど文筆家も多かったですよ。

- 林間都市計画の範囲は鶴間駅周辺まで続いていたと思うのですが、鶴間駅の西南方で矢倉沢往還をずっと行ったところに、三菱の岩崎家の広大な土地があって、たしか牧場があったように記憶していますが -

田丸 あそこは岩崎家が持っていて終戦後岩崎さんから小田急が買って分譲したのです。向い側の南林間寄りには朝倉さんが広く土地を持っていましたが、あれは朝倉さんが小田急の3代目の社長でもあった東急社長の五島慶太と知り合いで、五島さんの紹介で小田急から朝倉さんに譲って、朝倉さんが分譲したのです。

- とにかく広い土地ですから、ずい分いろいろなことがあったと思いますが、あれは戦時中でしたでしょうか、将校住宅もかなり建っていましたね。将校住宅の建設は小田急と軍部との何か提携があったのでしょうか -

田丸 いや、軍部のいうことに従うことも多かったが将校住宅の場合小田急としては土地が売れば良いということで、相手は誰でもよかったです。ただ昭和12年9月に陸軍士官学校が市ヶ谷から座間に移転して来て、その年の12月には天皇陛下の行幸があって、天皇の命名で士官学校が相武台と呼ばれるようになって...小田原線に相武台前という駅ができた、皇族や旧軍隊の高官が小田急を利用することも多くなりました。当時の座間村、新磯村や上溝村、大野村にかけて、陸軍士官学校を始め、陸軍造兵廠・陸軍通信学校・陸軍第三病院など陸軍関係の施設がぞくぞくと建設され、これらの施設を含有した軍都計画が進んでいた時期ですから、南林間の地域にそれが影響しないということではなくて、将校住宅にしても、士官学校ができれば当然将校さんの家族のための住宅も必要になるわけです。この頃には、軍関係の施設に勤める人もずい分多くなって、小田急では昭和13年6月から南林間都市駅前から相武台駅までバスを走らせました。もっともこれは長続きはしませんでした。下鶴間のたしか目代さんという人が運転してくれたと思いますが、この人が早く亡くなられて、そのあとは戦争で人手がなくなり、運転手はいなくなるし、小田急でも電車はどうにか走らせたけれども、バスどころではなくなっていたのです。

- その頃は戦争でしたね -

田丸 結局会社としてはいい町にして、いい人達に沢山住んでもらいたい。そのためにはいくらでも犠牲を払うという方針でした。新宿に行くのに成城学園なみの運賃で乗れるキップを発行したりね。土地を買ってくれた人に2年間の無料バスを発行したりして、それにずい分各方面からの援助も受け、会社でも努力をおしませぬ林間都市の建設に励んだのですが、みんながいいところだと気が付いてくれて、いよいよ土地を買おうとする頃には、もうおそくて、飛行機がうるさい、松林のイメージの消えたところになっていたのです。

(p22・旧大和村字別(下鶴間・深見・上・下草柳)人口動態表参照)

林間都市計画の挫折

- 江ノ島線の敷設以来の林間都市建設にかける小田急側の努力は非常にわかります。それは私達が通常考えている以上の意気込みだったようです。今お話をうかがっていていちいちもっともとうなずける立派な都市構想だったのだなと改めて感心しました。それに街路にしても各種施設にしても文化的都市づくりの基礎の部分は現にかなり実現されていたのですが、それが昭和16年10月には南林間都市・中央林間都市・東林間都市といった駅名から都市の部分をとってしまって、単に南林間・中央林間・

東林間としてしまったというように、初期の都市構想が建設途中で挫折していくというか、思うような結果を得られなかったという結末を迎えるのですが、その原因を田丸さんはどうお考えになっていらっしゃるか、もちろん原因については複雑な要素があると思いますが、その一端でもうかがわせていただけたらと思いますが -

田丸 そうですね。まず、戦争ですね。昭和 13 年には旧海軍省が航空基地を、市域の南西部の一郭を含んだ土地に建設して、昭和 16 年には帝都防衛海軍基地として使用されるようになりますね。さっきも話に出ましたように、市域の西北に隣接する相模原市や座間市の市域には陸軍関係の軍都計画があったでしょう。いやおうなしに騒然としたふん囲気になりますね。

- 軍都計画には直接かかわらないにしても、直ぐ隣りまで軍都計画区域が広がっていたのですから、その影響はさげられませんね。日本中が戦時態勢下で右往左往していたのですから、まったく文化都市建設を続ける状況ではなかったでしょうね。市域では第二次世界大戦の末期に南林間と中央林間の間の新開地区が爆撃をうけましたが、南林間の地域には直接の被害はなかったのですね -

田丸 あの頃は燈火管制といって夜の空襲に備えて電燈を暗くしたのですが、新開では何か光がもれていたのではないのでしょうか。南林間は爆撃はうけなかったけれど、わたしはあの頃警防団長で空襲になると飛び廻っていたので、機銃掃射の銃弾にあたるどころでしたよ。

- ほんとうにあの頃は首都に近いし、軍事施設に囲まれていたのですからたまりませんね -

田丸 厚木もやられたし、電車も機銃掃射をうけてね。でも戦争中はどこも大変だったのだから仕方がないんですが、林間都市計画が挫折せざるを得なかったのは、戦争に負けて、戦勝国の連合軍総司令部の命令で農地改革がされたでしょう。あの改革は財閥や官僚、地主を中心にした日本の旧勢力を打倒することが目的だったから非常に厳しい指令で、農地の不在地主の所有を禁止したでしょう。あれが決定打でしたね。

小田急が売却した土地は月賦で分譲した場所が多かったから、帳簿上は小田急の名義になっていたのです。それに戦争中には松林は松根油を採るといって松はほとんど伐採されて、根まで掘って供出したのです。あとのことなど考えていられないですよ。戦争に負けちゃうかもしれないという時でしたから、でもほんとうにいい松だったんですよ、抱えきれない程のね、おしかったけれど仕方がなかった。

- くぬぎ林もありましたね -

田丸 雑木は薪にするために伐ったのです。戦争中は食糧もなかったけれども焚くものも無かったです。町長や役場の人に来て、みんなに配給する薪がないから田丸雑木を伐らせてくれというんですよ。しょうがないでしょう。みんな困っているんですから、だからいいでしょう伐ってくださいといって、ほとんど伐採しちゃったんです。みんな伐っては駅の前の方の渡辺という運送屋があるでしょう。あそこへ積み上げて、みんなに配給したのです。

- そういえば薪も配給でしたね -

田丸 それでね。その後は食糧難だからみんな開墾して畑にしちゃったんですよ。グランドだったところも大和学園が開墾して食糧を作っていたんです。それらの土地の所有者が小田急になっていたから不在地主だというんでみんな農地法にひっかかっちゃったんです。でもね、わたしはそんなバカな話があるかってくだったのです。だってそうでしょう。薪がないから伐らせろといって伐っておいて、食糧がないからといって麦を作らせてくれというから作らせた。今度は不在地主だから取るというのでは、あまり人道にはずれているじゃないか、あそこはもともと宅地にする予定だったのですからね、松竹の土地もそうだったのですが、それじゃ大谷さんに申訳がたたないじゃないかっていってね。

- 結局松竹の土地はどうなったのですか

田丸 農地法で取るのでは、あまりにも不当じゃないかということで、せめて原価の帳簿価格でいいから買い取ってくれと交渉しましてね。農地委員に買い手をさがしてもらって、農地委員会にまかせて買ってもらったのです。大谷さんもそれで了解してくれたので。

- それでは今はいくつかに分けて、個人の所有になっているのですか -

田丸 そうです。

- グランドの敷地はどうなったのですか -

田丸 あそこも畑になっていたので農地法で取られるところだったのですが、これもち

よっと待ってくれと、ここは将来学校が建つところで、学校用地としてどうしてもとっておかなければならない土地だということで、大和学園の農芸専門学校の名義でようやく確保したのです。今大和学園の短大の校舎が建っているところです。これは大変なことでしたね。ずい分苦労しましたよ。

東林間の方にあった土地は畑にはなっていなかったが、未墾地として農地法で買い取られたのです。将来開墾し得る土地だとみなされたのですね。これではどうしようもないですよ。個人の土地にしても月賦で売っているでしょう。まだ買手の名義になっていない土地が多かったので、うっかりしているとみんな農地法で取られちゃう。更に困ったのは戦争中に小田急が東京急行と合併してね、渋谷にあった東急百貨店をやめさせて小田急・京浜急行・京王帝都・東横線などと一緒に本社の事務所にしたのです。そこに土地の売買契約書や土地の区画図などを置いてあったのですが、それを全部爆撃で焼失したのです。それを整理するのでそれは大変でした。

- そんな状態では思い切らざるを得ませんね。ほんとうに立派な都市計画でしたのに残念ですね -

田丸 あの都市計画が挫折したことが、良かったか、悪かったか今となってはわかりません。ただ、いい街づくりをするつもりでした。農地法にしても悪いことばかりがあったわけではありませんしね。財産を公平に分けようというのですから、幸せになった人も多勢いるはずですよ。でもね林間都市の建設には大打撃でした。

- でも戦後に経済が復興して来て、現在の南林間の繁栄の基礎は、やはり小田急の林間都市計画に負うところが大きいと思いますね。まだ大きな邸宅の名残がある街ですし、戦後にできた他の開発地に比べれば、やはり風格を残していますね -

田丸 路が多過ぎて、自動車が突然とび出してくるので、あぶなくてしょうがありませんけれどね。まあ小田急の手からはなれて、住宅地としてしっかり定着しましたからね。

- 最近は二条通りを中心に全く空地がないですね。小田急としてはもう乗客の獲得に苦労することはなくなりましたね -

田丸 今はほんとうにいい鉄道になりました。昔のことが夢のようです。

- 結局林間都市計画は昭和4年頃から実施されていったのですが、日本が昭和12年頃から戦争気運が強くなって、16年12月8日には米・英に対し宣戦布告をするよう

になり、それが敗戦につながったために、都市建設を途中で断念せざるを得なかった。都会の人達を誘致するためには、余りに時間が少なく時期が悪かったということでしょうか。そして戦争が終った時、豊かだった自然は失なわれ、戦後のあまりにも急激な人口の増加は余裕のある街づくりを許さなかった。田丸さんもおっしゃったように、それで良かったのか、悪かったのかはわからないけれど、もう当初の計画を再現するすべは、全く失われていたということなのではないでしょうか。人の力ではどうにもならない、何かとほうもなく大きな時代の流れの強さを感じますね -

思い出の中の林間都市

- ところで、田丸さんは現在も納税組合長など大事なお役目をされて、大変お元気でいらっしゃいますが、何歳におなりでしょうか -

田丸 83 歳になりましたよ。

- それは大変お若くみえますね。田丸さんが初めて南林間にこられた昭和4年といたしますと、ざっと50年前になりますが、南林間に移られた頃のお話を少しかがわせてください。まず、駅に降りられた時の印象はいかがでした -

田丸 いいところでしたよ。林を切り開いて線路がずっと敷かれていて、駅の周辺には松林が続いていました。軽井沢を思わせるような、開静な、空気のうまいところでした。わたしは山梨県の北巨摩の生れで後は八ッ岳、右は駒ヶ岳、左は金峰山といって昔水晶を掘り出した山でした。そして下の方に甲府の街が見えて、富士山は家の廊下から真直ぐのところに見えていました。そんなところで育っていますから、松林に囲まれた南林間はほんとうにいいところだと思いましたね。

- 『神奈川県風土記』という雑誌が発行されていますが、今年の新年号から中央林間にお住いの小説家の龍膽寺雄氏が「相模野日記抄」を連載されていてね。昭和初期に中央林間・南林間辺りを林間都市といていた頃の風景を描写されているのですが、その一文に「見はるかすかなたまで、すすきの原の間にのどかに松林が点綴(てんてつ)し、西を望むと、丹沢山塊の向うから富士山が顛(いただき)を覗かせ、その南には箱根の二子山が霞んで見えて、広茫千里といった感じだった」「この辺は、南に数里隔てて湘南の海岸に接しているために、空気中にオゾンが多く含まれ、酸素が多いせい、庭で落葉などを焚いても、もの凄い燃焼力を示して、まるで火薬が破裂するような燃えかたをするので、恐しくなって水をかけて消したりする」と書かれています、こんな景観があったのでしょうかね。

田丸 まったくそうです。中央林間の方にはすすきの原が広くひろがっていて、南林間は松林に囲まれていました。

- よくみなさんから聞くのですが、松林の中に入ってしまうと方向がわからなくなって、狐につままれたようにぐるぐる廻ってしまって、出口がわからなくなったそうですね -

田丸 そうです。奥の方に行くからね。迷っちゃうんです。小田急が十条通りまで区画して、その奥に六反といって6反歩(約 5,950 平方 m)に切られた山林があって、その向うにもう一つ6反に区切られた山林があって、その区域を向う六反と呼んでいた。その西側は座間分だったが、ずーっといい松林が続いていました。

- 休みの日などは何をされました -

田丸 山遊びです。茸狩りとか、鳥打ちとか、コジュケイはいるし、初茸は沢山採れるし、五月頃になると松露が出て、今の林間小学校のあるところ辺りが松露の本場だった。

- 小松林ですか

田丸 いや、大きな松、松露は小松林には出なくて、大きな松林でなくては出ない。小松林は初茸です。あの辺は素晴らしい松林だったからね。

- 山はずい分歩かれたのでしょうか -

田丸 歩くのが仕事だったから、全域を歩いたものです。休日には江ノ島にもいきましたし、浅草などへも遊びにいきましたけれども、月に一度は全域を歩きましたね。

- その頃の生活は、ずい分不自由でしたでしょうか -

田丸 人がいなくてね。わたしの前に小田急の社員で測量などをした人で、土地の管理をしていた牧政美さんがいて、田丸さんが来てくれたので安心したってっていましたよ。何しろ今日は10人集まったなどという、えらい騒ぎでした。初めは電気が敷かれていなくてね。ロウソクと石油ランプで半年位は過ごしました。

- 電気は南林間だけ敷けていなかったのですか -

田丸 公所には敷けてはいますね。電気屋さんは原町田にしかなくて、ようやく交渉し

て、公所から電気を敷いたのですが、かなりの距離で、林や目黒川の谷を越えて来るのですから、大仕事でしたよ。

- 生活物資はどうされました -

田丸 ほとんど下鶴間の宿の商人が注文をとって歩いてくれましたね。その頃は宿が一番お店がそろっていて、米屋さん・荒物屋さん・干物屋さん・八百屋さんなどがみんな来てくれました。魚屋は茅ヶ崎から来ていました。今わたしの家の隣にいる魚才が茅ヶ崎から毎日車に魚を積んで、はち巻をしてすっ飛んで来るんですよ。洗濯屋さんなどは平塚から来ていました。その内にその人達が増えて来てお店を持つようになって、だんだん商人が集ってきました。銀座の松屋の出店が出ていたこともありました。

- 下鶴間の宿からは、昭和6年には村から町、市と変る大和市の南林間代表の議員として活躍された加藤喜太郎さんが、駅前に転居されていますね -

田丸 駅前で「サクランボ」という喫茶店のような店をやってね。だからあの人のことをサクランボと呼んでいた。昭和8年にはもう村会議員になって、それ以後農地委員になったり、納税組合長になったり、よく南林間地区のために働いてくれましたね。その頃宿からは首藤円治さんも来て床屋をやっていた。それから議員を長くやっていた青木寿松さんも草柳から引越して来てね。あの人は初め玉子売って歩いていて、南林間に来て肉屋を開いて成功した人ですが、一つ話にね、昔は玉子売りに江ノ島まで行ってたんだが鉄道なんてないから歩いて行って、江ノ島に渡る時には頭に玉子をのせて川を渡ったもので、江ノ島線が開通して俺はずい分たすかったってね。そんな時代だったのです。なつかしい人達ですが、あの人達が商店街の草わけでしょうね。

- その頃は東京の方からも人が移って来たのでしょうかね -

田丸 東京の人達は空気もいいし、生活環境もいいからということで、どうせ住むなら林間にいって住もうと金持ちが見当をつけて来るのですがね。勝田さんなどという人は、しばらくして来た人ですがね、三井の鉱山系統の重役で九州の大牟田辺りで仕事をしてた人だそうですが、当時は東京の杉並にいて、金が残っちゃってしょうがないから、住むなら南林間の方がいいやと言って、土地を買って住むようになったのですが、この人など面白い人で或る日わたしのところへ来て「神奈川県高座郡林間都市」だけで葉書が届いたと言って感心して、これが正しいんですねっていうので、わたしはしょうがないから「いや、林間都市というのは小田急が勝手に付けた名前です。正しくは、高座郡大和村下鶴間何番地ですよ」と説明したりしてね。のんびりしていたもの

です。

- 駅前の広場などもきれいでしたね。公園風に大きな円い花壇がいくつかあって、低い植木や草花が芝生の中に植えてあり、手すり風に花壇の周りに丸木の低いさくが結ってあって、朝など通勤の人や学生が三三五五花壇で仕切られた幾条かの小径から集って来るといったいい風景でしたね -

田丸 駅舎も二、三度建てなおしたのですが、ちょっとモダンな感じでね。そして大抵の家の庭には松の木があってね。

- 南林間は村の人達からは、かなり遠い存在で、あそこは都会の人達が住むところで、我々とは違う人達が住んでいるといった特殊な意識で接していたようで、お互にすぐにはなじみ合えなかったようですね。でも子供達が村の小学校に通ったり、村の人達の中からも南林間に住む人がだんだん出て来て、村との交際が始まり、村から入った加藤さんや当初からの開発人であった牧政美さんが、村会議員に立つようになり、そのあと小田急関係の沼田利一さんなどが議員になって、大和村の中の一つの街として定着していったのですね。田丸さんも議員になられていますが、あれは昭和30年から38年までの2期、丁度町から市に変わった頃ですね -

田丸 わたしは会社が定年になってから議員になりました。終戦後もいろいろありましてね。大和市の水道は初め高座海軍工廠の官舎に水道が欲しいということで、水の窪に清水が沸くので、あそこを水源池にして水道が施設されたのが初めでしたが、それが終戦で軍から離れて、町に移管されたのですが、その水道を敷く時などは、あの頃鶴間駅の東側に高座海軍工廠の工員住宅が沢山できていて、当時高座海軍工廠の仕事をしていた土建業の大丸さんと呼ばれた坂本達馬という人が、その辺りを代表していたのですが、子分が多勢いて強い人なんです。それで水道を敷くのに、やれ南林間の方が先だとか、西鶴間の方が先だとかいってね、加藤さんなんかとけんかをするんです。丸太棒をもってやるんですよ。自転車ほっぽり出して山の中を逃げ歩いたりしてね。今考えるとおかしいけれど、本気でやるんですよ。そうかと思うとわたしのところに来てね。水道を通すんだから線路の下を渡らせるなんていって来て、昼間やると保線夫にしかられちゃうから夜中にやらせるなんていって、夜中にみんなで集って線路の下を渡ったりしてね。おかしかったね。

- ほんとうに思い出は尽きないでしょうね。田丸さんは南林間がお好きですか -

田丸 好きですね。わたしは惚れて来たのですからね。

- よくわかります。今日は長い間ありがとうございました。大和市域でも特殊な成り立ちをしている南林間の開発の過程がわかって来ました。今後はこのお話を参考にさせていただいて、できるだけ資料を集めて、また、他の人達にもお話をよくお聞きして、大和市の昭和期の歴史にキラリと光を与えた林間都市建設の模様を大和市史の一端に編み込ませていただきたいと存じます。今後ともよろしく願いいたします。どうぞ健康にお気を付けになって、うんと長生きをしてください -

(昭和 56 年 12 月 23 日・57 年 2 月 6 日大和市役所にて録音 聞き手 庶務課市史編さん係)

図 南林間都市平面図

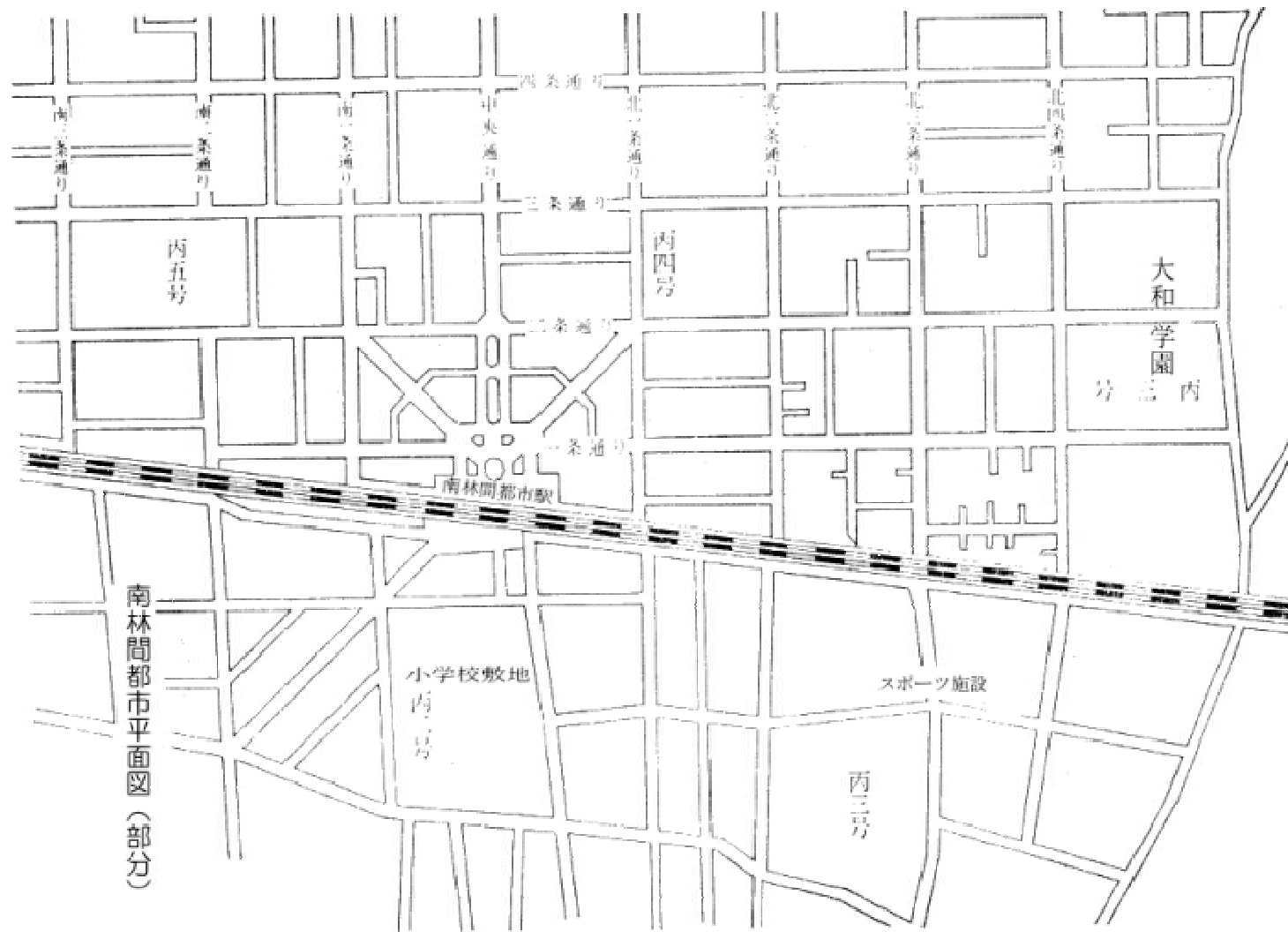


表 旧大和村字別(下鶴間・深見・上・下草柳)人口動態表

年 度	字 戸数人口	下鶴間	(下鶴間の内 南林間地区)	深 見	上草柳	下草柳	計
大正14年	戸	362	0	192	109	62	725
	男	1,155	0	582	347	233	2,317
	女	1,098	0	559	355	216	2,228
	計	2,253	0	1,141	702	449	4,545
昭和 5年	戸	428	83	236	105	70	839
	男	1,417	160	712	371	278	2,778
	女	1,317	133	697	382	217	2,613
	計	2,734	293	1,409	753	495	5,391
昭和10年	戸	590	137	224	112	57	983
	男	1,604	248	662	344	205	2,815
	女	1,614	281	735	337	193	2,879
	計	3,218	529	1,397	681	398	5,694
昭和18年	戸	888	245	389	222	135	1,634
	男	-	-	-	-	-	-
	女	-	-	-	-	-	-
	計	-	-	-	-	-	-
昭和23年	戸	1,650	454	658	292	264	2,864
	男	-	-	-	-	-	-
	女	-	-	-	-	-	-
	計	7,990	2,041	3,296	1,707	1,260	14,253
昭和30年	戸	2,712	865	1,845	560	64	5,731
	男	5,833	1,699	3,837	1,182	1,154	12,006
	女	6,135	1,747	4,071	1,415	1,351	12,972
	計	11,968	3,446	7,908	2,597	2,505	24,978
昭和56年	戸	22,642	8,162	6,735	4,545	4,615	38,537
	男	34,655	12,111	10,212	7,266	6,931	59,064
	女	32,870	11,310	9,551	6,813	6,793	56,027
	計	67,525	23,421	19,763	14,079	13,724	115,091
備 考	国勢調査照査表(T1・S10・S30),統計書類(S6),町制施行資料(S18),常住人口調査照査表(S23),統計月報(S56)より作表.						